# 生きる力を育むための学校行事の取り組み

## ── 様々な体験学習を通して国際社会で活躍できる児童・生徒の育成を目指して ──

前台中日本人学校　教頭
茨城県稲敷市立君賀小学校　教頭　平　井　　伸

キーワード：学校行事，現地校との交流，宿泊学習，体験入学

### １．はじめに

日本から飛行機で３時間，北回帰線上にある島国台湾は，四季を問わずいろいろな果物を食することのできる国である。この台湾にある台中日本人学校の校庭ではバナナ，マンゴー，ライチ，パッションフルーツ，ドラゴンフルーツなど南国のフルーツが収穫できる。特にバナナの木は多い。数え切れないほどある。夏が収穫の最盛期であるが，１年中収穫できる。収穫時には木から垂れ下がる青々としたバナナの房を特殊な鎌で切って，１週間ほど寝かせておくと食べごろになる。日本でいうモンキーバナナといわれている種類で果肉は緻密でねっとりとした舌触りで，甘くて濃厚な味わいがある。

このバナナを食べ，灼熱の太陽の下で元気に生活している台中日本人学校の子どもたちの特色ある教育活動の一端を紹介したい。

### ２．学校の概要

台中日本人学校（以下台中校と記す）は台湾のほぼ西側中央の台湾第３の都市である台中市（人口約100万人）に隣接する台中縣にある。

台北日本人学校台中分校として1977年に開校した当初は台中市内にあったが，1999年９月に台湾中部を襲った大地震により校舎が大きく損壊し，使用が不可能となり，移転を余儀なくされた。この時，当時の李登輝総統の計らいにより，台湾製糖の用地を再建の地として提供いただき，新校舎建設を進め，翌年２月には現在の校舎が完成し，台中縣大雅郷での教育活動が始まったのである。

現在，台湾の日本人学校は台中校の他に台北校，高雄校と２校あり，規模的には台中校が３校の中で最も小規模である。児童・生徒数（2008年８月現在）は136名，ここ５～６年の間はほぼ130名から140名程度で推移している。

台中校は他の２校に比べ国際結婚家庭（両親のどちらかが台湾国籍を持つ親）の割合が大変高い。ここ数年はその割合が50～60パーセントの範囲で推移している。原因の１つは，日本から仕事で家族とともに移り住む日本人の割合が伸びないことにある。特に中学生を子に持つ家庭では，父親が単身赴任という場合が多い。台北や高雄ほど，進学のための学習塾は少なく，高校への進学を考えると父親が一人で単身赴任する場合が多い。

３年間の派遣期間中，台湾国籍を母親にもつ子どもがずいぶんと入学してきた。ところが，母親の中には日本語が思うようにできない人も見られる。このため子どもの日本語もおぼつかない。授業は日本語のため，学習に当然支障をきたしてしまう。それでも台中校としては日本国籍があれば子どもの将来を考えて受け入れてきている。

本来，海外にある日本人学校は「日本国憲法，教育基本法そして学校教育法に則り，かつ学習指導要領に基づき，

心身の発達に応じて，初等及び中等教育を行うことを目的とする」学校であり，将来的に日本の学校に戻ってもスムーズに学校生活を過せる素地を培うための学校である。

このため，国際結婚家庭などの子どもたちが多く在籍している台中校では，特に日本語を学ぶ時間を設け，日本語力をつけるための教育活動を行っている。また，生きる力の育成を図るため，学校行事を通して培うことを重点として取り組んできている。特に国際結婚家庭の子どもたちの多くは台湾で生まれ育ったため，日本の文化的行事などに直接触れ合う機会が少ない。このため七夕集会やこいのぼり集会，学習発表会など日本にはない行事も台中校では生きる力のための学習活動として積極的に進められているのである。このため授業日数は日本よりも多い207日を確保し，週の時間数も２～３時間程度多い教育課程で編成されている。

## ３．特色ある学校行事の取り組み

### (1) 新民高級中学國中部体験入学

海外で生活する日本人学校の生徒たちは，家庭を中心とした日本人社会の比較的狭い人間関係の中で生活しており，台中校のような小規模な日本人学校では進級してもクラス替えがなく，学習環境もあまり変化しないのが現状である。このような生活または学習環境にいる生徒たちは，多くの日本人学校がそうであるように，様々な体験の機会が日本の中学生と比べて少ないように思われる。特に職場体験学習や上級学校の授業体験など進路学習につながる体験を実施することは困難である。海外の学校ならではの交流集会にしても現地の学校と半日程度の交流は行っているが，思い切った交流は難しい状況にある。

そのような中で，台中校では中学部２年生が新民高級中学國中部に体験入学をさせていただき，１週間（５日間）現地校の生徒たちと授業を受け，台湾の学校生活を体験している。もちろん中国語で授業が進められるため，子どもたちにとっては大変であるが，この貴重な体験が今後の進路を考える上で大変参考になっている。

### (2) 現地校との交流

① 大雅國中との交流会（中学部）

台中校の中学部はここ数年全学年合わせても20～30名程度の生徒数であり，中学部全体で行事に取り組んでいる。その中でも，毎年行われる大雅國中（学区内にある中学校）との交流会では，一年ごとにお互いの学校を訪れ，交流を深めている。

ここ数年は，大雅國中吹奏楽部の演奏と中学部の和太鼓演奏を相互に披露しあうことで，文化的交流を図っている。また日本の文化的行事に触れてもらうために，この日に合わせてPTAが餅つき大会を開催してくれている。実際に國中部の生徒に餅をついてもらい，昼食時には餅を振舞っている。わずか一日だけの交流であるが，生徒にとっては慣れない中国語を精一杯使って交流を図り，終了時には別れを惜しむ様子も見られるほどである。

② 汝鑾國小との交流会

台中校から歩いて10分程度の所に長年交流を続けている汝鑾國小がある。中学部と同じように一年おきに相互の学校を訪れ交流を深めている。小学部の場合は中学部に比べて人数も多いため，各学年間での活動が中心である。台中校での開催時には日本の遊びや紙トンボなどの制作活動を紹介し，実際に遊んだり作ったりして交流を深めている。

### (3) 修学旅行

① 小学部修学旅行

小学部６年生が２泊３日で台湾南部へ出かけている。年度によって多少見学地は変わるものの，台湾南部方面は定着している。台中校における修学旅行のねらいは「台湾の自然や文化に触れ，地理や歴史の学習を深める」

ことであるが，それとともに台湾南部に住む人々との出会いの旅でもある。

まずルバルバおばさんと陳おじさんとの出会いである。二人は「原住民」で異なった民族の出身である。夫婦であり日本統治下で日本語教育を受けられた方で今でもしっかりとした日本語を話す。普段の生活では日本語を話さなくなったが，台中校の子どもたちが来ると，喜んで日本統治下の古きよき時代やここでの生活の様子について語ってくれる。お二人のお話の後，この地域で結納品として使われたトンボ玉（粘土細工）作りという貴重な体験をさせて頂くのである。

もう一つの出会いは山地國小の子どもたちとの出会いである。毎年活動のテーマを決めて交流を行っており，昨年度は「踊り」を，一昨年度は「食」をテーマに取り組んだ。また３年前は修学旅行の日程に合わせて，運動会を開催していただき，山地國小の運動会に参加した。山地國小の歓迎ぶりにはこちらが恐縮するほどである。

子どもたちにとって台中校での修学旅行は台湾の人々と出会える絶好の機会でもある。

②　中学部修学旅行

２年に一度中学部では２・３年生が修学旅行を実施している。旅行先は日本の関西方面（奈良・京都・大阪）である。生徒たちは台湾で日本の教育を受けているが，実際に日本を訪れたり，日本の生活を体験したりしたことのない生徒が少なからず在籍している。そのため，台中校で行う修学旅行は単に学校という学習・生活の場を離れて実施する旅行・集団宿泊的行事とは異なる性質を持っている。つまり，台中校における修学旅行は台湾にいては体験することのできない「仲間と共に日本を体験する場」といった位置づけで取り組んできている。

### (4) 宿泊学習並びに校外学習

台中校の宿泊学習は日本のような青少年のための宿泊施設がないため，各教室を宿泊場所にして宿泊学習を実施している。１日目は小学部・中学部に分かれて校外学習を実施。昨年度，小学部は飛牛牧場に行き，動物と遊んだり，クッキー作りを行った。中学部は鹿港（ルーカン）という古い港町に出かけて行って名所旧跡を巡るウォークラリーを実施した。帰校後，夕食は中学部の作ったカレーライスを全校縦割り班で食べた後，キャンプファイアーやキャンドルファイアーとそれぞれの活動を楽しんだ。

小学部１年から中学部３年が寝食を共にする唯一の活動であり，子どもたちにとっては学校の教室を宿泊場所にして縦割り班で一夜を過ごすことは貴重な体験である。特に低学年にとって，親元を離れて１泊２日を過ごすことは忘れられない思い出となっている。

### (5) 学習発表会

台中校における学習発表会は保護者に公開する学校行事の一つであり，２学期が始まるとどの学年も学習発表会のためにかなりの時間を費やして，計画的に進められる。小学部では学年ごとに創作劇を中心としたステージ発表を行い，中学部は４年前から和太鼓演奏に取り組んでいる。昨年度は創立30周年を迎え，記念式典の後，第２部として学習発表会が行われた。

子どもたちにとって，この学習発表会が最も思い出に残る行事の１つとして感じている子が多い。また日頃一生懸命練習した成果を舞台に立って表現すること，こういった活動が子どもたちに多くの経験を与え生きる力を育んでいる。

### (6) その他の学校行事

台中校では，その他にも数多くの行事がある。こいのぼり集会,七夕集会，節分集会（小学部），運動会，水泳記録会，餅つき大会，１年生を迎える会，小６・中３を送る会，児童会・生徒会選挙，マラソン大会等，日本では授業時数確保のため削減された行事も，台中校では今も続いている。207日という授業日数と７時間授業が確保され，

行事の時間を踏まえた教育課程が編成されているため多くの行事が実施できるのである。そしてこのいろいろな行事を体験することで子どもたちの生きる力を確実に育て，表現力の向上に役に立っていると考える。

## ４．3年間を振り返って

昨年度，台中校は創立30周年を迎えた。当時「子どもたちのために日本人学校を」という在留邦人の願いから，米軍将校宿舎を校舎として借用し，児童６名で開校して以来30年という年月を数えるまでに至った。

今回この30周年記念事業に微力ながら携わることができ，台中校の歴史を紐解くことができた。その中でも特に人々の記憶に今も残っているのが，1999年の「921集集大震災」である。幸いにも発生時間が深夜であったため，子どもたちは難を免れることができた。当時，台湾日本人会台中支部が編集した「揺れた　崩れた　でも頑張った」の記録集で，当時の学校運営委員長が「日中であったなら，多数の被害者がでたであろうと思うとぞっとする。夜でよかった。」と書いている。この時，学校関係者の中から，廃校の危機という言葉が聞かれたほどであった。このように地震という未曾有の出来事に遭遇しながらも着々と歩み続けることができたのはこれまでの諸先輩方の叡智と努力の賜物である。

また昨年度は，北京オリンピック野球のアジア予選のため台中市に来ていた星野ジャパン（星野監督，山本・田渕コーチ）の皆さんが，大会の合間をぬって，わざわざ台中校まで足を運んでくれた。星野監督からは五輪に賭ける意気込みを聞き，子どもたちは自分たちで作った応援歌を歌い，千羽鶴と寄せ書きを贈り子どもたちの思いを伝えた。夢のようなこの出来事に子どもたちだけでなく，参加した保護者にもすばらしい感動を与えてくれた出会いであった。

そして，オリンピックアジア予選終了後，オリンピックへの出場報告と応援してくれたお礼のため3月に再び台中校を訪れてくれた。１回目の訪問の時，子どもたちが一生懸命応援してくれる姿に心を動かされ，再度訪問することになったのである。何事にも精一杯取り組む台中校の子どもたちの姿はこれまでの様々な行事で培ったものである。

私にとっての３年間の思い出が，派遣３年目に集中しているが，30周年記念事業や星野ジャパンとの出会いは私の教員生活でもたぐい稀な貴重な体験だったと思う。

もちろんよき思い出ばかりではない。派遣１年目は台風が学校を３度も直撃し，風速50メートルの台風の時には，校庭内の樹木が軒並み倒され，施設・設備等に甚大な被害を及ぼしたのである。もちろん，学校は臨時休校となり，学校に何日も泊まることになり，南の島ならではの経験をさせてもらった。私自身も生きる力を学んだ。

当然，台中校の子どもたちも台中校ならではの行事や学習を経験して，生きる力をしっかりと培うことができたのではないだろか。